

環境十法則に関する研究

— Study on Ten Principle Rules Governing Environment —

竹林征三 Seizo Takebayashi*

1. はじめに

環境学のフレーム

華厳宗では差別無限の宇宙を四方面より見たものを四法界と称している。

四法界	意義	環境四法界			
事法界	差別の現象界をいう	(地圏)火山現象、山地崩壊現象、地震現象等 (水圏)水の華現象、洪水、津波等 (気圏)気候現象、四季、騒音、粉塵等 (生物圏)生物(人間、動物、植物等)の存在と活動			
理法界	超差別の真理の実体界	・数学(代数、幾何、統計、集合等) ・力学(弾性力学、流体力学、熱力学等) ・基礎化学(原子、分子等) ・基礎生物学(生化学、細胞学、遺伝子学等)			
事理無礙法界	現象界と実体界との一体不二の関係にあるのをいう	(地圏)プレート理論による地震や火山現象の解釈 (地学) (水圏)水循環として河川現象の解釈 (水理学) (水圏)水循環として河川現象の解釈 (水文学) (気圏)大気循環としての気候現象の解釈 (気象学) (生物圏)(例)生命システムとして生物体を解釈 (生物学)			
事事無礙法界	現象界の諸事象(一切界事象)が互いに相互に相応無礙(密接に関係している)こと	Action環境作用としての人類の生存と活動 人類の生存と活動に対する環境からのAction 地圏 地形改変(国土改造)地下資源探掘 地震、火山、山地崩壊、浸食 水圏 水質汚染、水消費 洪水、津波、高潮 気圏 大気汚染、騒音、振動、粉塵、地球温暖化、オゾン層破壊 暴風、気候変動、寒暖 生物圏 生物資源(農産物、水産物、牧畜、林産物)ペット化 伝染病、危害、天敵、寄生 生物生息空間の改変			

四法界とはまず第1が差別の現象界をいう事法界。そして第2が、超差別の真理の実体界をいう理法界。そして第3が、第1の現象界と第2の実体界との一体不二の関係にあることをいう事理無礙法界。第4が、現象界の諸事象(一切の事象)が互いに相互に相応無礙(密接に関係している)ことをいう事事無礙法界の四つである。

四法界は差別無限の宇宙の森羅万象をこの四つの方面より観照する(学問)することを教えている。

また、現在のあらゆる現象が相互に関連しあい錯

綜している環境現象をどのようにアプローチすれば良いかの方法論そのものを教えている。

即ち、まず第1の事法界のアプローチとは差別ある諸現象即ち、例えば地圏の山地崩壊現象、地震現象、生物の生存と活動をどのように観察し分類するかというアプローチである。即ち、自然観察学と自然分類学等をいう。

第2の理法界のアプローチとは第1の差別の現象界にも差別を超越した真理の実体界があることを意味する。即ち、観察学や分類学の対象として見た地

Keyword、環境計画、地球環境問題、計画基礎論

*建設省土木研究所環境部長、土木学会フェロー会員

TEL 0298-64-2211 FAX 0298-64-7183

圏、水圏、気圏、生物圏の諸現象の中にはそれらを全て律する数学や力学、基礎化学、基礎生物学等の基礎科学としてのアプローチである。

第3の事理無礙法界のアプローチとは第1の観察学や分類学によりアプローチした諸現象を第2の基礎科学より解明しようとするアプローチである。地圏現象に対する地学、土質力学、岩盤力学、水循環現象に対する水文学や水理学、それに大気循環現象に対する気象学等々のアプローチである。即ち応用理学としてのアプローチと位置づけられる。

第4の事事無礙法界のアプローチとは第1の観察学や分類学によりアプローチした諸現象、相互間の密接に複雑に関連し合っている現象を解明しようとするアプローチである。

即ち、人間の活動という現象（事）と水圏の水質現象（事）との因果関係や、人間の活動という現象（事）と地形改変（事）との因果関係など事と事との融通無礙な因果関係をアプローチするものであり、これはまさに環境学そのものである。環境学とは観察学や分類学や基礎科学、応用科学等とは全く異なる学問体系アプローチをすることが必要であることを教えている。

環境学とは自然界における差別無限の諸現象が相互に密接に関係し合っている現象を解明しようとするアプローチである。

即ち、華嚴宗の四法界のうちの第4の事事無礙法界が環境学そのものである。

次に環境問題は他の諸現象と違い際だった特性をもっていることを考えて見る。

2. 十玄門の環境システム

華嚴宗で説く四法界の中で事事無礙法界の特徴即ち、幽玄なる道理を十方面から説明したものが十玄門である。これには十種の特徴が互いに縁となって他の特徴を起こすゆえに十玄縁起無礙法門と称し、その略を十玄門と称している。

玄門とは専門家の深い見方真理の領域（華嚴の玄海）への道とでもいう意味である。十種の特徴が事事無礙に縁起することにより十玄縁起とも称する。華嚴宗の四法界のうち事事無礙法界は前節で環境学の体系そのものであることを考察した。従って事事無礙法界の特徴道理が十玄門であるということは十玄門は即ち「環境学の十法則」ということを意味し

ている。十玄門は華嚴宗の二祖智儼の創唱によるものであり、それを三祖賢首は一部これを改めたことより、前者を古十玄、後者を新十玄と称している。以下は新十玄であり、古十玄は（ ）書で示す。

（第一法則）同時具足相応門

諸事象が同一空間に於いて縁起の関係をなし、具足円満し彼此照応すること。

一つの事象が他の事象を同時に具え含んでいること。

〔環境第一法則〕因果律と両面性

環境事象の因果律は環境作用（因）とその結果の環境形成作用との関係にあり、一つ事象は因の側面と又、果の側面の両面性を同時に具えている。

（第二法則）広狭自在無礙門（諸蔵純雜具徳門）

諸度内の行という点からみて一多・純雜の相即相入を語る一門。

広と狭とが自在に融合してさわりがないこと。

〔環境第二法則〕柔軟性とゆらぎ

生態学的循環はめったに柔軟性を失うことはないが、その際さまざまな変数は相互依存的にゆらぐ。

（第三法則）一多相容不同門

一つの事象と多くの事象とがその力や用（はたらき）を互いに摂融するが、常に一多の特徴を失わない（安定している）こと。

〔環境第三法則〕安定性と多様性

生態系の安定性は自らの関係のネットワークの複雑さ、言い換えると生態系の多様性に決定的に依存している。

（第四法則）諸法相即自在門

一つの事象と多くの事象との体が融通無礙であって一即多・多即一であること。

相互円融無礙であること。

〔環境第四法則〕相互依存性

生態系の全構成員は関係のネットワークによって結ばれ、そこに於ける全ての生命プロセスは相互に依存し合っている。

（第五法則）隱密顯了俱成門（秘密顯顯俱成門）

一つの事象と多くの事象とは隠と顯とがあるが、また互いに縁起を成立させて先後がないこと。

〔環境第五法則〕生態学的循環とその原動力

生態系の構成員同士の相互依存は物質とエネルギーを絶えず循環させることによって成り立つ。

太陽エネルギーが緑色植物の光合成によって化学エネルギーに変換され、全ての生態学的循環の原動力になる。

〔第六法則〕微細相容安立門

一つは多くを含み、多は一を容れ一多の破壊しないこと。

大と小とが互いに相入れ、しかもそのまま存在すること。

〔環境第六法則〕多重システム

微小小宇宙には全ての環境事象が構成されておりそれが集まって更に自己完結の中宇宙を形成する。宇宙はこのような多段宇宙システムよりなる。

〔第七法則〕因陀羅網法界門（因陀羅微細境界門）

諸事象が一多相即相入して重々に映現し、隠映互いに現れて無尽なこと。

（インドラ神の網に例える。）

〔環境第七法則〕無限関係性

全ての環境事象は重々無尽に相互に関係しあって構成されている。

〔第八法則〕託事顕法生解門

智という点からみて縁起せる諸事象は一つとして仮託せるものがないこと。

事柄を上げて、それにこと寄せて法の義理（相即

相入の理）を表し、人に理解を生ぜしめること。

〔環境第八法則〕相似律と代表性

諸々の環境事象はそれにことよせる事例で説明出来る理がある。即ち、環境現象には相似律があり、適正な代表性があるもので人に理解を生ぜしめること。

〔第九法則〕十世隔法異成門

世即ち時間という点からみて一多の相即相入を明らかにする門で、過去、現在、未来の三世に各三世があるから合わせて九世を成じ、九世は相即相入するゆえに一念となり総と別とで十世となる。時間の永遠の流れと存在。

〔環境第九法則〕共進化性と持続性（進化・順応・適応・遷移）

生態系に含まれる各生物種の長期的な生存（持続可能性）は有限の資源基盤に依存している。

生態系の中で生物種の大半は、創造と相互適応・順応・遷移の相互作用を通じて共進化する。

〔第十法則〕主伴円明具徳門（唯心廻転善成門）

諸事象はみな如来蔵心をその本性としていて、どれも心の外の実在ではないということ。

六相のうち一つが主となれば他の五相は伴となり補完すること。

十玄門とエコロジー・十則

華嚴宗・十玄門	エコロジー・十則 (環境十玄門)	エコロジーの八法則 (フリッチョフ・カブラ博士)
どうじくそくそうあうもん 同時具足相応門	因果律と両面性	
こうぎょうじざいむげもん 広狭自在無礙門	柔軟性とゆらぎ	柔軟性とゆらぎ(第6法則)
しよぞうじゅんどうぐとくもん (諸蔵純雑具徳門)		
いったそうようふどうもん 一多相容不同門	安定性と多様性	多様性(第7法則)
しよほうそうそくじざいもん 諸法相即自在門	相互依存性	相互依存(第1法則)
おんみつけんりやうていじょうもん 隠密顕了俱成門	生態学的循環とその原動力	生態学的循環(第3法則)
ひみつおんけんぐじょうもん (秘密隠顕俱成門)		エネルギーの流れ(第4法則)
みさいそうようあんりつもん 微細相容安立門	多重システム性	
いんだらもうほうかいもん 因陀羅網法界門	無限関係性	
いんだらもうほうかいもん (因陀羅微細境界門)		
だくじけんほうしょうかいもん 託事顕法生解門	相似律と代表性	
じっさいかくほういじょうもん 十世隔法異成門	共進化性と持続性 (進化・順応・適応・遷移)	共進化(第8法則) 持続可能性(第2法則)
しよほんえんりやうぐとくもん 主伴円明具徳門	補完性と捷み分け性	パートナーシップ(第5法則)
ゆうしんえんりやうぐとくもん (唯心廻転善成門)		

〔環境第十法則〕補完性と捷み分け性

生態系の生命を持つ全構成員は微妙な競争と協力

の相互作用を行いながら様々な形の合い補完する関係を保持している。

3. 環境十法則とフリッチョフ・カブラ博士のエコロジー八法則

最先端の理論物理学者であるオーストリア生まれのフリッチョフ・カブラ博士はデカルト哲学やニュートン物理学で大きな発展を見てきた理論物理学もそれらの手法哲学でも素粒子の運動等カオスの理論ガイアの理論等の次のステップの現象解決に息詰まっております、東洋哲学の思考で新たな解決への道が開けるとし、「ニューサイエンス」と称して科学の飛躍的發展を目指して活躍している。

一方、フリッチョフ・カブラ博士は現在の混迷を極めている環境問題解決の道も、昨今世界中の上辺だけを飾って事足りれりとする「環境主義」が跋扈する中、枝葉末節的な違いのみに目を奪われているエコロジーな「シャロー（浅層）エコロジー」と称するのに対し、フリッチョフ・カブラ博士は環境問題解決の鍵は東洋哲学であるとして、それらに基づくエコロジーを「ディープ（深層）エコロジー」論と称しその展開を積極的に図っている。

これら一連の研究活動を踏まえてフリッチョフ・カブラ博士は各種真理探求の末に環境問題の真髄としてエコロジー 8 法則を提唱するに至った。

華嚴宗十玄門が教えている環境十玄門即ち、エコロジー十則との対比をすると表のようになる。

東洋哲学の自然現象の観照の深さに改めて感心させられる。

4. 環境五則・五訓

華嚴宗の四法界のうち事事無礙法界が環境問題そのもののズバリであること、更に、華嚴宗の十玄門は環境十法則を述べていることを上述してきたが、10の数は覚えるには多すぎる。「水」の本性を水五則・五訓という形に黒田如水がまとめたと言われているが、環境問題の真髄についても数は少ない方が普及しやすい。

フリッチョフ・カブラ博士の八法則でもやはり多すぎる。やはり五法則程度が限界と見て、上述の環境十法則を黒田如水が整理したと言われる水五則に習い環境五法則の形に再編成して見た。華嚴宗十玄門のうち環境問題として現在の知見のもとに類似性の強いものをまとめたものである。

環境五則・五訓	
一、	ある時は因となり、又果となり、因果の律に法と円融無礙なる体を呈し、その恒常性を保とうとするは環境なり。
二、	極めて多様な様態を呈しつつ、互いに相い依存しつつ、それに安定性を託するは、環境なり。
三、	太陽の深き恵みを様々な形で吸収し、己のつきせぬ活動の源とするは、環境なり。
四、	縦横無尽に相い関係しつつ、四次元空間に壮大にして無限の多重体系を構築するは、環境なり。
五、	自他捷み分け、相い補い、共に遷移の道に持続の歴史を刻むは、環境なり。

水五則	
一、	みずから行動して他を動かし、
二、	むるは水なり
三、	常に己の進路を求めて止まざるは水なり
四、	障礙に遭いてその勢力を百倍するは水なり
五、	みずから深くして他の汚れを洗い清濁併せて容るるの量あるは水なり
六、	洋として大海を充し、発しては蒸気となり雲となり雪に凝りては氷となり、凝りては玲瓏たる鏡となり、而もその性を失わざるは水なり

参考文献

- 1) 親広「華嚴五教章冠註」第45巻503
- 2) 「タオ自然学」フリッチョフ・カブラ著、吉福伸逸etc訳、工作舎発行、1971. 11
- 3) 「ディープ・エコロジー考」フリッチョフ・カブラ、アーネスト・カレンバック著、鶴田栄作編訳、佼成出版社、1995. 6
- 4) 「老子の哲学」大濱皓著 頸草書房 1962, pp383
- 5) 「大地五訓」一水を知り、大地を敬うー竹林征三、「土木施工」第36巻第6号pp80～83
- 6) 「大気環境問題と大気五訓」竹林征三、第21回日本道路会議論文集、1995. 10
- 7) 「実務者のための建設環境技術」竹林征三編著、山海堂、1995. 7. 15